

技術の伝道者 田中豊太郎

平井 充

三誠ビル外観（札幌景観資産、さっぽろ・ふるさと文化百選）



三誠ビル1階のカフェの天井に当時のRC打放しを見ることができる



北海道帝国大学附属医院本館外観
(北海道大学附属図書館所蔵)



北海道帝国大学医学部基礎医学校
(北海道大学附属図書館所蔵)

北海道帝国大学の営繕組織

大正7年4月、北海道帝国大学が発足した。正式には明治9年に創立した札幌農学校が始まりであり、明治40年の東北帝国大学農科大学を経て改組したというほうが正しい。「Boys, be ambitious」で有名なウィリアム・S・クラークは、この札幌農学校の初代教頭である。その頃のキャンパスは、現在の時計台付近にあり、クラークの思想のもとW・ホイラーによって施設が設計された。札幌農学校が開校してからは、市街地の人口増加に伴い、キャンパス付近の都市化が進んでいく。そのため、明治32年になると現在の北海道大学キャンパスの敷地で移転工事が開始される。この計画は、文部省技師であった中條精一郎によって始められ、明治44年に工手学校出身の文部省技師である新山平四郎（前号にて報告）によって最初の体裁が整えられた。彼らの木造による古典主義建築は、北大の発展の記念碑となって現在も美しい風景をつくっている。

北海道帝国大学には、初めに農学部と

医学部が設置された。さらに、大正13年になると当時の国内の工業発展を背景に工学部が設置されている。この新体制では、学部を拡充するために、新山の時代のような文部省からの出向ではなく、大学の自立した組織として営繕課が組織されることになる。この営繕課で、新山の後を継いで実質的にキャンパスを整備したのが、田中豊太郎(第2回生)という人物である。

新山平四郎と田中豊太郎

新山は、明治36年に文部省の札幌出張所長として渡道し、明治42年に秋田出張所長となるために札幌を去っている。彼が最後に計画した新キャンパスの第二農場は、転任から2年遅れた明治44年に竣工している。新山の転任は、文部省に入省してから熊本、長崎、東京、札幌、秋田、桐生、横浜というように定年まで続き、とにかく忙しい男であった。

じつは、この新山平四郎と田中豊太郎は、ともに工手学校の同級生なのであ



北海道帝国大学工学部本館外観
(北海道大学附属図書館所蔵)

る。この2回生というのは、福井房一^{*1}や
一井九平^{*2}などの優秀な人材を多く排
出している。新山は文部省技術者として
かなり早い出世を遂げているのに対し、
田中は遅咲きの技術者であった。田中
は、北海道帝大の技師となってキャンパ
スに訪れたとき、8年前に新山が才能を
揮って作りあげた美しい建築群に出会
うことになる。二人の間にどうい関係
があったのか詳らかではないが、田中は
北海道帝国大学のキャンパスを任された
とき、前任者の新山が残した作品を意識
していなかったと言えば嘘になるであら
う。事実、田中は新山のような古典主義
的建築とは異なり、過去の建築様式と決
別し、新しい時代を標榜するセセッション
様式^{*3}によって、より近代的で大胆
な作品をつくることになる。

技術の橋渡し役

田中豊太郎は、明治3年に大分県で生
まれる。明治23年に工手学校を卒業す
ると2年ほど民間で働き、それから陸軍
省へ入省して図工、5年後に技手となっ
ている。この頃、陸軍省に在籍していた
三橋四郎^{*4}と親交をもち、RCに関する
知識を深めたと考えられている。明治
37年には、大蔵省の勤務となり妻木頼
黄^{*5}のもとで働いている。大正3年にな
ると倉敷紡績の不正工事の現場調査を
依頼され、翌年にはそのまま建築顧問
となっていくつかの工場の設計監督を行っ

ている。大正6年には、大阪市財団法人
石井記念愛染園新築工事設計という仕事
を経て同年、文部大臣官房建築課勤務と
なって大阪へ赴任し、翌年に大阪出張所
長になる。それから大正8年に渡道して
北海道帝大技師となる。田中が北海道帝
大の仕事に関わった期間は、大正11年
に日本赤十字北海道支部病院建設のため
に退職するまでの3年弱の期間だった。
新山は札幌出張所に6年間在籍していた
が、技師となって本格的にキャンパスを
手掛けてからは3年ほどで転任してい
る。当時のキャンパス整備のひとつの
チームだったのだろう。

また、時期は定かでないが、北海道帝
大を退職してから田中は、田中工務所と
いう建築事務所を開業している。大正
15年に札幌に藪合名会社ビル（現三誠
ビル）を自身で設計し、ここに事務所を
置いていた。昭和4年になると、長野宇
平治^{*6}に請われて日本銀行増築工事の
現場監督になるべく東京へと活動の場を
移すことになるが、第一期増築工事を勤
め、第二期工事の半ばで体調を崩し辞職
し、引退している。

田中の場合、新山のように文部省技師
として一貫した職歴を重ねているわけ
ではなく、ところどころで民間の仕事にも
従事している。とはいえ、当時の倉敷紡
績は単なる民間企業というには大きすぎ
る存在であったし、また児童福祉の父と
言われる石井十次^{*7}の開設した愛染園

の設計など、重要な仕事をしている。さ
らに、日本赤十字北海道支部病院は、旭
川市最初のRC造の建物として記念すべ
きものであった。

田中のように官庁と民間を横断的に
行き来する技術者が表れたということは、
官庁で蓄積された最新の技術や経験が民
間に移植され始めた時期ということがで
きる。付け加えておくと、当時の建築技
術者は、RC造において構造計算や施工
指導、見積指導なども自身で行なけれ
ばならず、現在のような分業化されたも
のではなかった。そのような意味で田中
豊太郎という人物は、近代技術を習得し
た国家から民間への優れた技術の伝道者
だったといえる。

北海道帝国大学時代

北海道帝大に赴任した田中は、大学
内に新設された建築事務所所長となり
活動を始めることになる。このときの
田中は49才であり、すでに老練の技術
者といったところだろう。ここでは、医
学部附属病院本館と工学部本館が彼の代
表的な仕事となる。医学部附属病院本館
は大正10年9月に竣工しており、工学
部は大正12年12月の竣工ということか
ら医学部が最初の仕事だったということ
が予想される。医学部新営工事について
は、田中がどの程度関わったのかはわか
らないが、当時の立場からすれば、少な
からずの関わりをもっていたことが伺わ



昭和7年の北海道帝国大学全景
(北海道大学附属図書館所蔵)

れる。また、工学部創設の工事の際に田
中は、文部省直営ということで文部大臣
官房建築課札幌出張所所長を併任して
おり、当時の複雑な組織体制のありかたが
垣間みられる。

医学部附属病院本館

この建物は、シンボリックな中央のマ
ンサード屋根と石積みの車寄せを中心に
シンメトリーの堂々としたファサードを
もっている。幾何学的なモチーフを用い
て構成し、素材に変化をもたせたセセッ
ション様式でまとめられている。車寄せ
のアーチ以外は、直線による幾何学に
よってデザインされているので、やや固
い表情ながらも、新しく帝国大学となっ
たその名に相応しい意気込みを感じさせ
るものである。平面形状は東西に逆Eの
字型で、西5丁目樽川通に正面を向けて
おり、現在の北13条門脇の駐車場のあ
たりに建っていた。病棟の配置計画は、
ドイツのハンブルク大学病院が参考にさ
れたという。また、厳しい予算のなかで
堂々とした本館を建設できたのは田中技
師の手腕であったとの記録も残ってい
る。^{*8}

工学部本館

規模の大きな工学部をゴシックスタ
イルのセセッション様式でまとめている。
キャンパス内の区割りに対して、中央部
だけ45度角度を振ったダイナミックな

配置である。外壁が白いタイル張りだっ
たことから「白壁館」と呼ばれていた。
現在の工学部と同じ場所に建っており、
イチョウ並木から車寄せに向かう45度
に振られたアプローチに当時の痕跡をみ
ることができる。また、翼を広げて中庭
を囲い込むような構えだったことから、
「鶴翼館」と呼ぶものもいたという。当
時の俯瞰写真をみると後者のほうが相
応しい感じがする。この頃になると、デ
テールに自由さが表れている。工学部本
館の羽ばたくのびやかな構成は、キャン
パスに新しいピクチャレスクな風景を作
り出した。

田中工務所の仕事

工務所自営時代の仕事としては、旭川
の日本赤十字社北海道支部病院と藪合名
会社ビルが知られている。

日本赤十字社の病院は、全体的にシン
プルでモダンな構成であるがファサード
中央部と開口部廻りには、北海道帝大医
学部病院本館と同じようなセセッション
様式のレリーフが施されている。旭川市
最初のRC造であり、フラットルーフの
シンメトリー構成でモダニズムを感じさ
せる堂々とした建物であった。

藪合名会社ビルは、札幌市最古RC造
建築であり、いまでも札幌市景観建築物
として歴史的景観をつくっている。1階
に居心地の良い喫茶店が入っており、そ
この天井に、当時の技術を感じさせる小

幅板の打放しを見ることができる。ま
た、外観は塗装されているが、内部のオ
フィス部分は当時の面影を残しているの
で、ここに田中建築事務所があった当時
の雰囲気を感じることができる。

著作活動

田中は、忙しい業務にも関わらず、著
作活動もしていた。工手学校卒業後ま
もなくの明治25年に『建築雑誌』に「建
築材料調査報告」を掲載し、大蔵省時代
の明治38年に「和洋建築工事仕様設計
実例 上」、明治41年に「和洋建築工事
仕様設計実例 下」、田中工務所時代の
大正14年に「建築仕様全集」、昭和2
年に北海タイムスへ「文化建築に覚醒せ
よ」、昭和4年に「建築見積便覧」を記
している。田中の著作には、辰野金吾、
妻木頼黄、矢橋賢吉、三橋四郎などの名
前が序文や校閲に見られる。

また、建築学会の活動にも積極的に参
加しており、大正8年から昭和3年まで
建築学会会館建築委員、昭和4～5年
まで役員を務めている。さらに、昭和8
年に建築学会で行われた「明治建築座談
会」に錚々たるメンバーのなかに田中の
名前もみられることから、仕事を引退し
た後もこのような活動を続けていたこと
がわかり、当時の社会的地位も伺われる。

教育者として

田中豊太郎の教員歴も興味深い。最初



日本赤十字社北海道支部病院
 (新旭川市史より)

は、大蔵省時代の公務の余暇に、神田にあった東京工科大学建築科講師を勤めている。そして、倉敷紡績に務めた大正4年9月には、工手学校仕様書積算所講師となっている。また、工務所を営むことから大正11年から昭和3年まで立川札幌工業学校で教鞭を執っている。

東京工科のときの教え子で、指田竹次郎(1891~?)という人物がいる。卒業後は、デ・ラランデ建築事務所に入所するがデ・ラランデの死去に伴い退職し、倉敷紡績に勤務する。このとき、田中豊太郎も倉敷紡績に在籍していた。その後、神田の木田建築事務所⁹⁾を経て、北海道帝大雇いとなっている。これは、田中の自由裁量として北海道帝大に指田を呼び寄せたということらしい。たぶん、木田建築事務所も田中の紹介だったと思われる。指田は、工業高校卒業とはいえ、給与の面で文部大臣官房建築課からきた技手と同じ待遇を受けていた。さらに田中は地元札幌の技術者を積極的に採用し始めたり、部下を建築学会に会員へと推薦したりしていることから、後継の面倒見の良さが伺われる。

豊かな人間像

このように田中豊太郎という人物を俯瞰すると、新山のような文部省技術者として一貫した立場と比較して多様である。田中自身は、49才になって北海道帝大技師となるため、技術者としては遅

咲きと言える。しかし、この頃には文部省出張所時代とは異なり、北海道帝大の営繕組織の前身であった建築事務所の所長として自由な裁量があったため、田中の性分に合った仕事ができただろうか。

また、特筆すべきは田中の後輩に対する面倒見の良さである。田中は、大蔵省時代に後輩であった木田保造(第34回生)の教育係をしていたという。そのとき、木田と関根要太郎¹⁰⁾を引き合わせており、のちに2人が函館で活躍するきっかけを作った。さらに、田中は木田の媒酌人も務めるなど公私にわたって付き合いがあった。その木田が、函館で北海道初のRC造である寺院の造営工事の一切を請負い、建設費集めに苦しんでいたときの面白いエピソードを田中が記している。

「今ひとつ、函館の本願寺を伊藤平左衛門君に代って木田君が処理されている時に、私に向って盛んに函館遊行を迫る。当時、私も閑散な身だったので出かけていった。境内の木田君の寓居に寝泊まりして、昼は工事場内をブラブラし、夜になると料亭へ案内を受け、四、五日遊んで帰京した。ほど経て、礼を出す、その返事に木田君の本音を吐いていく。

実は、下げ金要求の『こんたん』から、君を高利貸の番頭に見立てたのだ、許してくれ。

—これにはさすがの私も二の句が継げなかった。」

田中の風貌も気になるところだが、木田のような茶目っ気のある後輩に頼りにされる田中の人間像が浮かび上がる。このような田中の性格は、広い人脈を作り出していたと考えられる。

新山のように文部省に身を置いて自身の設計に没頭しながら建築をつくり続けた技術者とは違い、幅広い活動と人脈のなかで建築界における自身の役割を見出していたのが田中豊太郎という人物だったのではないかと。田中豊太郎という人間は、人物像としての記録が残されていない新山と違って、いろいろな逸話に顔を出してくる。田中の面倒見のよい性格とその存在感が際立っていたことの証拠であろう。彼の珠玉の作品は、多くの写真に納められ、北海道帝国大学の栄華を極めたといっているほどの一つの世界観をつくっていた。しかし、彼の作品の殆どが残っていないため、今では貴重な資料の中でしかその世界と出会うことができない。とはいえ、北海道帝国大学の創立期におけるキャンパスが充実した時期は、田中豊太郎の存在を無くして語れないのである。

追記

今回の取材で資料提供にご協力いただいた北海道大学の池上重康先生、北海道大学名誉教授角幸博先生に感謝申し上げます。

資料

明治建築座談会 (第3回)

(明治6年5月10日建築学会4議室にて開催)

出席者 (五十名弱)

伊東忠太郎 板本豊太郎 大澤三之助君
 西合信 藤野 小 林 金 平君 清水新吉君
 藤野 貞君 菅 藤 進 源君 田中豊太郎君
 坂本 祐賢 中川 敏 國君 小島泉次郎君
 中村彦太郎君 北野宇平治君 富田 虎 助君
 橋本 三 郎君 保 崎 謙 也君 山田七五郎君

副会長中村彦太郎君、監事藤野、石原信之、森井健介の4名列席。



明治建築座談会

注記

- ※1 明治2年(1869)福岡県生まれ。工手学校卒業後の海外留学生の第一人者として明治26年にアメリカのクーバーユニオンに入学し、首席で卒業する。主な仕事として上海日本人倶楽部や三菱合資会社上海支店が知られている。
- ※2 埼玉県生まれ。大蔵省臨時業煙草取扱所建築部技手を経て京都府に赴任。明治40年に技師となる。主な仕事として京都府駅舎、丹後震災記念館、峰山小学校本館が知られている。
- ※3 国内においては明治の様式建築とその垂流から分離すると共に、野田俊彦の建築非芸術論に代表される建築実利主義の克服も目指した運動と、その建築家たちによる自己の感性に基づいたデザイン。慶応2年(1867)東京生まれ。東京帝国大学を卒業し、陸軍省、通信省、東京市技師を経て、三橋建築事務所を営む。多くの官庁建築の設計に携わる。また、鉄筋コンクリート工法を考案した。京都郵便電信局、日比谷図書館、奉天総領事館など。
- ※4 安政6年(1859)東京生まれ。工部大学校でJ.コンドルに学び、アメリカのコネル大学で修士号を取得した。大蔵省などで多くの官庁建築を手掛け、明治時代の官庁営繕組織を統括した。工手学校教員。代表作には東京府庁舎、東京商工会議所、横浜正金銀行本店がある。
- ※5 慶応3年(1867)新潟県生まれ。帝国大学卒業後、奈良県庁舎の設計で評価を得る。また、日本銀行技師として辰野金吾の指導のもと、支店を多数設計する。昭和2年に日銀の技師長となり、本店増築の設計監理を行う。
- ※6 慶応元年(1865)宮崎県生まれ。明治期の慈善事業家。岡山孤児院を創設し、児童福祉の父と言われる。また、岡山四聖人と称される。
- ※7 『アラテ北海道帝国大学医学部開業十周年記念号』に「…貧弱なる創立費を以て堂々たる本館を建築し、十一月の開院までに間に合わせたるは田中技師の手腕の土か然らしむる所であった。」とある。
- ※8 木田保造(34回生)明治18年(1885)千葉県に生まれる。木田組(後の木田建築)の創業者。明治39年に工手学校を卒業し大蔵省に入る。この時期、大蔵省を退官し神田に事務所を構えている。潜函工法の発明者。主な仕事に、国内最初のRC造寺院として知られる真宗大谷派函館別院、銀座松屋デパート、函館元町カトリック教会など多数。
- ※9 明治22年(1889)埼玉県生まれ。東京工業学校卒業。三橋建築事務所を経て函館で木田とともに多くの設計活動を行い、晩年は埼玉で復興活動に尽力した。ユーゲント・シュティールの様式を取り入れた独特のデザインを得意とし、主な仕事として函館解散商同業組合事務所、亀井喜一郎邸、旧多摩聖蹟記念館などがある。

参考文献

- ・角幸博監修(2011)『北大エコキャンパス読本 建築遺産編』北海道大学総合博物館
- ・北海道大学125年史編集室編(2002)『写真集 北大125年』北海道大学図書刊行会
- ・皆川雄一ほか(2002)『田中豊太郎(1870-1947)の建築活動』日本建築学会大会学術講演梗概集(北陸)
- ・北海道大学125年史編集室編(2002)『写真集 北大125年』北海道大学図書刊行会
- ・池上重康ほか(2001)『北海道帝国大学の営繕組織の沿革と建築技術者について』日本建築学会計画系論文集第541号
- ・宮本雅明(1989)『日本の大学キャンパス成立史』九州大学出版
- ・木田保太郎(1942年、1976年再版)『伝記 木田保造』丸謹印刷株式会社



平井充 Mitsuru Hirai

- 1992 北海道立北高等学校卒業
- 2004 工学院大学建築学科2部卒業(初田研究室)
 東京工科大学非常勤講師(～2006年)
- 2006 工学院大学大学院建築学専攻修士課程修了(初田研究室)
 東京工科大学非常勤講師(～2011年)
- 2009 工学院大学大学院建築学専攻博士課程満期退学(初田研究室)
 一級建築士事務所 Drawing notes 設立
- 2015 (株)メグロ建築研究所に改組
 現在、DOCOMOMO Japan 幹事、工学院大学非常勤講師、実践女子大非常勤講師